

一昨日まで一人合宿をしていたので、観光はしていない。カンガルーもコアラも、クロコダイルも見ていない。

世界遺産の熱帯雨林も見ていないし、エアーズロックにはもちろん行っていない。

おまけにサイクロンが来ていて、シュノーケルすら出来ない。

でもケアンズという街自体が結構楽しい。そんな街の様子をお伝えしたい。

まずはオーストラリアの概要から。

1.面積： 768万 2,300km² (日本の約 20 倍、アラスカを除く米とほぼ同じ)

2.人口： 約 1,900 万人 (2001 年国勢調査)

3.首都： キャンベラ (人口約 31 万人)

4.人種： アンゲロサクソン系等欧州系人が中心

5.言語： 英語

6.宗教： キリスト教 (カトリック、英国国教会) 67%、無宗教 15% (2001 年国勢調査)



上記は、外務省のウェブの情報でちょっと古い。人口に関しては、昨年 12 月に 2 千万人を突破したそうだ。因みに、第二次世界大戦終戦時には 800 万人だったらしい。60 年間の間に 2.5 倍である。



メルボルンに行きたかった事は既に述べたが、ケアンズとメルボルンは飛行機で 3 時間も掛かる。地図を見てみると、その緯度の差は、サッポロと那覇間と同じくらいという事を知った。ケアンズが暑い訳だ。

最近、そのケアンズに日本人の移民が激増中だと言う事は聞いていた。

最近、本屋さんにも、『年金 20 万円 夫婦一緒に海外で暮らそう』みたいな本が大はやりである。

今回は、移住を意識して、そんなに暮らしやすい街なのかをこの目で見てみたレポートである。

ケアンズの日本人

先にデュッセルドルフの日本人街の事は書いた。あれほど日本語と日本人を海外で見る事はなかったが、このケアンズも全然負けていない。

こちらの方は、駐在員の家族ではなく、もっぱら観光客、ワーキングホリデー、短期・長期のホームステイそして語学留学生の若者だ。

ワーキングホリデー(通称“ワーホリ”)というのは、1 年間働きながらその国を旅する事ができるという制度で、若者に限ってビザが取得できる。昔はかなりマイナーな存在だったが、今ではオー

オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、フランス、イギリス、ドイツなど、多くの国が対象国として広がりつつあり、またその人数も増えつつあると言う。大学を卒業した後や、休学してワーホリに行く人が多い(若くして会社人生に行き詰まり、再起を賭けて、語学の勉強を兼ねワーホリをする若者も多い)。

ワーホリ向けの仕事として、ファームステイなんかも人気があるらしいが、日本語を活用した複雑でない仕事、つまりお土産店や日本食屋さんなどで働くケースが多いと聞く。いわゆるバイト。

結果としてケアンズの様なりリゾートのお土産屋さんは、客も日本人、店員も日本人という、なんだか軽井沢辺りのお土産屋さんの様相を呈してくるところがおかしい。

もちろんお店の前には日本語の看板だ。

サーティーワンアイスクリームは大繁盛。あれは確かアメリカの企業なのだが、お店の前には、日本語ののぼりが堂々と立っている。

日本から移住し、ケアンズの街で民宿を開いているという方に電話し、宿泊かたがた移住の話伺おうと思ったのだが、あいにく満室という事だった。

何でも最近若者だけでなく、年配の方が泊まりに来るそうだ。目的はケアンズへの移住を真剣に考えて、下見に来る事。

電話した時も、名古屋からの客が2週間滞在し、既に移住している人の話や、物件を幾つも見て回ったという事だった。この民宿の方も積極的にこういう移住希望者を支援しているようで、何でも相談に乗るから、とってくれた。

ユースホステルに泊まっていると、時々日本人と話す機会もある。

多いのがブリスベン辺りに語学留学に来ていて、休みを利用してケアンズに遊びに来たというケース。そして日本から家族が遊びに来ているので、というケース。

娘が異国に留学していたら、親としても心配だろう。様子うかがいと激励と、ついでに娘と一緒に楽しもう、という母親がとても多いみたいだ。

そして2月に入っているので卒業旅行の学生も多い。もう国立大学でも春休みに入っているところがあるそうだ。彼らは広いこの大陸を1ヶ月くらいで回ろうとしているのでとても駆け足である。



こうした店には必ず日本人の店員さんがいる。他の店でも結構日本人募集みたいな張り紙も多い。



ユースホステルの娯楽室。ツアーやダイビングの代理店も兼ねていて、商売っ気たっぷり。壁にはパンフレットが並んでいる。

そんな彼らは、私の活動ぶりを見て、とても理解できない、という冷ややか~な表情をしてくれるのだが...(オーストラリア人からは、おまえ最高に狂ってる、と笑われるし)。

日本人ではないのだが、観光客には中国人、韓国人もかなりいる。中国語を話すのは香港人が台湾人と思うが、どうも集団で行動するようだ。何故か皆が顔見知り。

おそらく、日本でも昔流行った、会社の団体旅行なのではなのかもしれない。スーパーマーケットでもお土産屋さんでも、もう皆で賑やかである。日本人もかつてはあんな感じだったんだろうな。

一方日本人は、日本人同士が海外で会うと、何となくよそよそしくなるのだ。しかしケアンズでは頻繁に会ってしまうので、実にぎこちない。

ケアンズのプロムナード

既にこの事は書いたが、ケアンズのメインだと思うので再び。

このプロムナードをがんがん走るのは私だけではない。もうケアンズ在住の人は誰でも、と書くと大袈裟だが、すごく多くの住民がジョギングやウォーキングを楽しむ(他に楽しみ無いのかよ、というほどの熱狂ぶり)。

ピークは朝7時頃と夕方6時頃。毎日走っているので常連さんから声を掛けてもらえるようになってきた。

オーストラリアの高校では部活みたいなものは無いと聞いたが、地元のコミュニティーでやっているのか、同じTシャツを来て走っている若者も多い。



汗をものすごくかくのだが、100メートルごとくらいに給水ポイントがあるので大丈夫。

このプロムナード、とても体に悪い事がある。強い紫外線もそうだが、実は“臭い”なのだ。それもおいしそうな臭い(と音)。

実は、プロムナードの各所に、バーベキュー場があるのだ。

予約なんか要らない。来て、スイッチを押すだけ。もちろん無料。

電気ホットプレートが熱くなった頃、スーパーで買ったバーベキューセットをガサッと開け、適当に味を調える。

そしてもう乾杯だ。



土曜日と日曜日は午前中から夕方までずっと誰かが調理していて、ワインで乾杯している。おいしそう。

家族で、友人同士で、と、と、とてもとてもとても楽しそう。

こちらは孤独に、朝食もそこそこにハードな事をしている。当然腹が減る。走っていても泳いでいても腹筋をしても、この無茶苦茶おいしそうな臭いにたまらなくなってくるのだった。

海を見ながらのバーベキュー、これだけでケアンズの価値は高い。



群れているペリカン。羽を広げると2メートル近くにもなる。のどかに浮かんでいる姿が愛らしい。

食べているすぐ側まで小鳥がやってくる。

日本に比べ、鳥が人をあまり警戒しない様だ。

激しく背筋をしている私の50センチまで近寄ってくる事も。

生い茂った木々にもたくさんの鳥が鳴いている。

中にはウグイスみたいな奴もいて、散歩する人々を楽しませている。

小鳥だけではない。時々、ペリカンも飛んでくる。

このプロムナードには、子供も楽しめる遊び場がいっぱいだ。

オーストラリアは、人口を増やそうとやっきなのか、子供に対して特にやさしい国だ。

高校までは無料という話を聞いた。加えて、日本よりもさらに充実した施設が多いらしい。



ジャングルジムや水を使った遊び場など、体を動かして遊ぶ遊具が一杯。

駐在員なのか、移住したのかわからないが、小さな子供連れの日本人が、プロムナードの遊び場に多くいる。

子供は時折英語交じりの会話をしている。発音なんて当然私よりうまい。

誘拐や不登校とは無縁のようでとてもものびのびと暮らしているように見えた。

再びプールネタ。

ケアンズの良いところばかりを書いてきたが悪い話。

泳いでいて、プールのベンチに置いておいた自分のバッグをふと見ると、何と無いではないか！

慌ててプールから出ると、向こうから白人が3人やってきた。

「このバッグ、お前のか？」

「ああ、そうだ」



警備員、警察も多いのだが、何故か狙われてしまった。実は、コインロッカーもあったのだが。

「今、二人組みがお前のバックを盗んだところだ。取り返したよ」

「????」

「もう向こうへ行ってしまった。黒人だった。ここには置いておかない方がいいぜ」

「????、有り難う。良く分からないんだけど、何がどうなったの?」

「俺達があそこで座っていたら、奴等がやってきて、そのバックをシャツの内側にこうして入れたんだ。だから盗人だと思い追いかけた」

「そうなんだ。いやしかし有り難う。金は入っていなかったが、眼鏡が入っていたので助かったよ」といいきさつがあり、無事にバックが戻ってきた。

しかし全く油断ならない。お前もか、オーストラリア。これじゃあ、安心して泳げない。

金は入れていないが、脱いだシャツと、ユースホステルの部屋の鍵、ビーチサンダルに眼鏡はどうしたってプールサイドに置いておく必要がある。困ったことだ。

無料のプールが、逆に犯罪の温床になっているのかもしれない。

今度は良い話。

プールサイドから続く芝生に女性3人。今回初めて見るトップレスだった。

何となく、泳ぐたびに視線がそちらに行ってしまうのは気のせいだろう。

気のせいというよりも、クロールの練習では、左右どちらでも呼吸できないといけないのだ。平泳ぎではしっかり顔を上げなければならない。度付きのゴーグルを持ってきて本当に良かった。

ケアンズの買い物事情

先ライブレポートにも書いたが、最近豪ドルが上昇し、かつ交換レートも著しく悪いので買い物を楽しむという感じにはならない。

同室のスイス人とスウェーデン人が、母国と同じように物価が高いと嘆いているくらいである。

日本人の私も同感なので、今やオーストラリアは異常な程、物価の高い国と言える。

近くのスーパーへ行くと、物の値段はこんな感じ。

・水 1 リットル	A\$1.6	160 円
・オレンジジュース 2 リットル	A\$4.0	350 円
・牛ミンチ 400 グラム	A\$2.8	250 円
・キッコーマン醤油 400ml	A\$4.2	372 円
・米(イタリア産)2 キロ	A\$4.9	429 円
・胡椒 1 ピン	A\$1.4	119 円
・惣菜のサラダ(小のパック)	A\$3.0	263 円
・ぶどう 400 グラム	A\$2.4	209 円
・バスタオル	A\$7.0	613 円
・安物サンダル	A\$5.2	461 円
・石鹸	A\$1.7	148 円

ステーキ肉と野菜は、概ね日本よりもちょっと安いくらい。果物は、上記のぶどうは安い、マンゴーなど 1 個 200 円くらいするものがある、豊富な割には高いのだった。

最も安い水は、1.5 リットルで A\$0.8(68 円)なのだが、最もメジャーな水が上記なのだった。とても高い。因みに、コカコーラは 2 リットルで A\$2.0(174 円)なので、上記より安い事になる。そして地元ブランドのコーラに至ってはその半額である。

因みに、枝豆は残念ながら売っていない。残念ながらと言えば、ここには牛丼屋とコンビニが無い。シーズンオフにもかかわらず、これだけ日本人がいるならば、きっと流行るだろうに。



カフェのカレーはある。もう、何から何まで日本語。閉まっていたので味わう事はできず。

不動産

買い物と言えば、買うつもりはないものの、土地を見て回ろうと思っていた。

不動産屋へ行くとこんな風に見える。英語と日本語と中国語で、

【この美しいケアンズで、不動産購入をお考えですか？ 外国人でも買える外資審議会認定済みの物件、家と土地のパッケージなど 22 万豪ドルよりございます】

そのパッケージだが、さすがオーストラリア、大体が 600 m²プール付きだったりするから驚いてしまう。

外国人の移住、投資に関する法律のレクチャーも受けた。ここでは外国人による詳しい移住方法は割愛するものの、基本的に『金持ちはウェルカムですう』みたいなところがあるようで、ちょっと嫌な感じ。

レストランは無茶苦茶高い。

これは観光地だからやむなしという気もするが、あまり利用できない。

トムヤンクンラーメンを食べたが、ちょっとで A\$8.8(770 円)もする。普通の中華料理一品が 1000 円近い。和食の何とか丼もしかり。

ピザに至ってはもっとひどい。郊外のドミノピザが A\$10(880 円)程度で、まあまあだが、お店で出ると、A\$20(1,760 円)になってしまう。(これは日本に比べやすい方だが、日本のピザが高すぎるのです。あれは世界的に見て異常です)



ケアンズで有名なナイトマーケットの一角。ケンタッキーあり、ラーメンあり、イタリアンありで何でも食べられるが、総じて高い。

またお店で飲むビールは一杯 A\$7(620 円)もする。

マクドナルドにも行ってみた。ハンバーガーは、一個 A\$1.55(136 円)。ドイツよりわずかに安い。今のところ世界第 2 位の高さである。因みに味は、今一つ。下のパンがあまりに薄い(5 ミリ)。そして肉はステーキと同じくらいジューシーさに欠ける。大きさは日本よりほんのわずかに大

きくらいか(因みに、私がつぶしてしまった訳じゃあないです)。

職探し

年金をもらう以前に、若いうちからケアンズに移住するなら、働かなければならない。

職を求めて活動してみた。

お土産屋さん、観光業などは日本人を積極的に募集している。

中には、月収5000(44万円)ドルも夢じゃない、などと書いてあるところもある。業務内容は、観光案内、空港送迎だそうだ。

幾つものお土産屋、飲食店が集中して観光名所となっているナイトマーケットには、とりわけ日本人が多い。そこにある床屋さんに行ってみると、20歳くらいの女の子が店を構えていた。オーナーだという。

仕組みを聞くと、このナイトマーケットを管轄している会社から間借りするらしい。場所と広さにより違って来るらしく、具体的な金額は教えてくれなかったが、とても高いよとの事。それでもビジネスとしてはうまく行っているそうだ。そしてできれば、日本人を雇いたいんだけど、とのこと。

「近いうちにケアンズに移住してこようと思う、職はどう探したらいい?」と聞くと、

「まず履歴書を作り、明日の新聞をみなさい」

とアドバイスがあった。何でも日本人は結構求職があるらしい。

お土産屋さんでも、レンタカー屋さんでも、日本人が多い割には日本語の看板が無いお店も多い。話を聞くと、

「日本人の客は多いし、対応したいのだが、会話にならないんだ」

と残念がっていた。そして出来れば日本人を雇いたいと。

もしケアンズに移住して仕事を探すなら、こうしたお店のオーナーと共同パートナーとして開業するのも良い手ではないかと思った次第である。

アボリジニの事

先住民族のアボリジニの人々は、苦難の歴史もあり、現在では人口の2%程度と聞いた。しかしケアンズではとてもよく見かける。

筋トレを終えて、日陰のベンチで休憩していると、昼食を取りに一人の植木職人がやってきたのでアボリジニの事を聞いてみた。

- ・ケアンズには、住民の10~15%がアボリジニの人たち。
- ・アボリジニと白人との間に特に問題はない。アメリカの様に偏見もさほど大きくない。
- ・ただアボリジニの教育レベルが低い事は問題になっている。政府はアボリジニの教育に対し、かなりのお金を使っているが、実際には教育レベルはまだまだ低い。

平日の昼に筋トレをしている私が妙に思ったのは、アボリジニの人たちがあまり働いていないでよく食べる、という事だ。

その昔、アボリジニの人々に政府が補助金を与え、あまり働かなくなってしまったという話を聞いた事がある。もともと狩猟を基本とし、あまり教育されていない事に加え、以前は迫害の対象にさえなっていたので、未だに白人のルールの下では、あまりうまく立ち回れないのかもしれない。

しかし一方で、よく食べるのだ。バーベキューコーナーを占めているのはアボリジニの人が多い。大家族で楽しそうなのだが、ステーキ肉やソーセージの他に、色の付いた得体の知れないジュースを2リットルのペットボトルで飲んでしまう。さらにはケンタッキー、マクドナルド、ピザのオンパレード。

たまには外で、ファーストフードを、というならば良いのだが、彼らの太り方は半端じゃない。もともとミクロネシアの人たちには太った人も多いが、あれは明らかに白人が持ち込んだ悪い習慣を身につけてしまったようで、何だか悲しくなってしまった。

たぶんつづく